

1

1 a 容易

b 習性

c 必定

d 境目

e 属性

f 真

2 I 出来あいの言葉 II 相手との一

3 A パ B レ C 無 D 有 E 未 4 X イ Y エ Z ウ

(完答)

5 ウ 6 (記述題) 7 コミュニケーション

8 I・IV 9 A 感情を含め B ついに相手

(順不同・完答)

2

1 鈴音が死んだ 2 I 後悔 II あの時のサ

3 伸直り 4 イ 5 (記述題) 6 (記述題)

7 ウ 8 1 1 9 番に

1

6 感情や思想や感覚や事物を当てはまる言葉に振り分ける際に、どうしても表現しきれない部分があるという性質。

(同意可)

2

5 鈴音を亡くしたという現実を受け止められずにいたから。

(同意可)

6 二十歳になり成人式をむかえるはずだった鈴音がこの世にいないという現実を改めてつきつけられたことで、癒えかけた心の傷をえぐられるような感覚におちいったから。

(同意可)

「配点」	
その他	1 1 1 3 4 6 2 5 6
各4点×14	56点
各6点×3	18点
各2点×13	26点

1 a 「容易」や b 「習性」は別の同音異義語を答えてはいけない。c 「必定」は必ずそうなることと決まっていること。d の「境」の右側の真ん中は「目」ではなく「日」である。e の「属」は、内側の部分を「山」や「ム」のように書かないようにしよう。f については文脈から「本当の」という意味の「シン」だとわかるだろう。

2 I — 線①の直前にあるように、「人が日常使っている」言葉である。同じ七字でも、直後の行の「普通に使う言葉」では、「どう」「それらしい」のかが説明し切れていないので、言いかえたことにならない。
II 本文のここより先で、「ヨウイに相手に同意を得られそうな言葉」「出来あいの言葉」「あまりにも素早く相手と繋がれる言葉」「（相手が想定している内容を）なぞる言葉」「単なる架橋としての言葉」のように言いかえられていくのを丁寧（ていねい）にたどりながら読み進めていくことができれば、この対照的な表現に気づくだろう。

3 A の「オンパレード」は物事がずらりと並ぶこと。B の「フリーズ」は言葉、言い回し。C・D の「無限」「有限」は、「対義語になる」という条件を読み落とさないように、また、答えを反対に書かないように気をつけよう。E の「未完」はまだ完成していないこと。「未」以外の打ち消しの漢字を入れないようにしよう。

4 X は「相手と繋がれる」と言っておきながら「単なる架橋」にしかなくなっていいことに注目したい。Y の「折」は、「暑さの折」のように使われる際は「季節」という意味になる。「折に触れ（て）」という慣用表現はぜひ覚えておきたい。Z は「……錯覚しがち」という表現から考えることができる。

5 ②を含む一文は「感覚として捉えたアナログをデジタルで表現することはできない」ということ具体例である。②の直後の「38」という数値は「デジタル」なので、②には「今日は38度もあった」という発言があらわしている「感覚」がはいる。

6 もちろん「アナログを『言葉』というデジタルで表わす性質」であるが、「デジタル性」を説明するよう求められているので、「デジタル」「アナログ」ということばを使わずに答える必要がある。「言葉には尽くせない」というのも「デジタル性」の特徴なので、そのニュアンスも答えに入れたいところである。

7 — 線④の直前の「定義」の内容から判断できるはずである。「一語で」という指定があるので、余計なことばを答えに入れないように注意したい。

8 ここでの「デジタル」とは「言葉（言語）」、「アナログ」とは「感情や思想など」のことである。「送り手」は「受け手」に対して「言葉」を伝えるので、【I】・【II】は容易にわかるだろう。【III】表現の【IV】「化」とは、直前の「ついに相手が言語化しきれなかった『間』を読みとろうとする」の言いかえであるところから考えられる。

9 「コミュニケーション」について述べられている本文の後半からさがす。「受け手」の方は、最後の段落のはじめに「伝えられたほうは……」とあるので、あとは制限字数に合うようにさがせば良い。「送り手」についてははっきりとは述べられていないが、「受け手」に期待するだけではなくて伝える側である自分も努力する必要がある、と考えたい。

②

1 本文の冒頭にこのような表現があった場合には、「その日に何があったか」と考えながら読み進める必要がある。

2 I (5-3)の二行目より後から、鈴音が死んだのは自分のせいだと「私」が自分自身を責めていることが読み取れる。文学的文章では、心情表現をおさえながら読むことが必須である。

II 「私」が、鈴音の死の原因が自分自身であると繰り返し責めていることから考える。「消えない瘡蓋（かさね）となって張りついたまま」なのは、時間が経った今でもマイナスの感情が残っているからであろう。

3 ③の八行前で「（鈴音との仲直りを）あきらめて」いた「私」が③の直後で嬉しそうな反応をしていることから考える。鈴音が「これまでは一度も使っていなかったはず」の「私」からの贈り物のマフラーを巻いていること、「二日ぶりに声をかけてきた」ことから、鈴音のプラスの心情をあらわしていることがわかる。

4 死に直面している鈴音が歌った歌に対して「せめて、楽しい歌であったと思いたい」、つまり、マイナスの状況は避けられなかったけれども、その中でもプラスの状態であってほしかった、という「私」の鈴音に対する願望が込められているのである。

5 — 線⑤を含む段落の最後の一文の「あらゆる言い訳を口にして」から、「いつも三人分つくってたから……」「これは鈴音が好きだったから」というのは本当の理由でないとわかる。

6 「心の傷」という指定語句を必ず使うこと。「引き裂こうとした」のは、鈴音宛てに送られてきた成人式の際に着る振袖のカタログである。そもそも、鈴音を亡くしたことによって「心の傷」をすでに負っており、このカタログのせいでさらに深まってしまったということがある。

7 「適当ではないもの」を選ぶことに気をつける。丸めたページには、絵美子と「私」の鈴音を失ったことに対する行き場のない悲しみが込められているのである。ウにあるような、着物メーカーの機械的な作業に対する不満は表現されていない。

8 ⑧の文に「コイン」とあるが、本文中に「コイン」が出てこなかったことから、なかなか見当がつけられなかったかもしれない。脱文補充の問いでは⑧の文がヒントになっていることがほとんどなので、深く考えたいところである。コインには「表」と「裏」の二面しかないため、それぞれ50%ずつであること、また、「裏」とは良くない意味で使われることが多いことから考えよう。良いことが起きる確率も悪いことが起きる確率も50%ずつだったのに悪いことが起こってしまった、ということである。

以上